

転校生の転入地への地域愛着醸成のプロセスに関する研究

那須 弘基(NE21-0154B), 望月俊男

キーワード：地域愛着 プレイスアタッチメント プレイスアイデンティティ 転校生 地元

1. はじめに

本テーマを扱うことになったきっかけは、筆者自身が自分の住む地域への良さが見つけれないまま成長してきたところにある。筆者は高校生になり、ようやく自分の住む地域の良さに気づき始めた。地域に対して嫌いという感情を持っていた住民が地域を好きになるということはまちおこしや地域の活性化にとっても重要なことである。学習指導要領でも地域とのかかわりの必要性が示されているように[1]、児童の地域への愛着の基盤を作るということが昨今では重視されてきており、子どもの地域への愛着に関する研究や取り組みは多数されている。しかし、児童の地域とのかかわりというものは薄れてきており、この希薄化を改善していく必要があるという指摘もある[2]。

筆者は小学校 4 年生の頃に東京に引っ越してきた転校生であったが、地域に愛着を持つような機会というものの特に与えられなかった。転校生というのは、いままで愛着を築いてきた地域を離れ、新しく引っ越してきた地域にまた愛着を築いていかなければならない。したがって愛着をもつような機会がないまま地域への愛着を築いていくことは難しいのではないかと考えられる。

そこで、本研究では転校生の転入地への地域愛着醸成のプロセスを調査し、どのようなきっかけで愛着を感じていっているのか、明らかにすることを目標とする。

2. 地域への愛着とは

Hernandez ら[3]は、地域愛着について、環境心理学の観点からプレイスアタッチメントとプレイスアイデンティティという二つの概念で説明している。プレイスアタッチメントとは、残りたいと思ったり快適だと感じたりする地域に対して人々が設定する感情的なつながりのことである。プレイスアイデンティティとは地域への所属感のことで、場所とのインタラクションを通して自らを記述するプロセスのことである。

以上の 2 つはどちらが先立つものでもないと言われており、分けることが難しいとも言われている。本研究で

はこのようなことを踏まえ、地域への愛着について調査していく。

3. 先行研究・類似研究

地域に住む人がどのように愛着を育んでいくのか、環境の変化により愛着に変化はあるのか、といういくつかの観点から調査を行った。

大人が愛着を育むための取り組みとして、妹尾[4]によると、地域ブランドの構築が挙げられている。都市部から山間部に移住してくることによる適応のプロセスに焦点を当てた研究が花森ら[5]によりされているが、これも大人を対象とした研究である。

子どもを対象とした研究は数少ない。尾関ら[6]は子どもが地域住民との交流や、大人たちの連帯感の強さにより愛着が高まるということを明らかにしている。加藤[2]は「探検」を行うことが重要であり、繰り返し探検することで地域や住民と交流し、それを他者に発信することで愛着の基盤を築くことができると述べている。

転校や転入に関する研究では、塚本[7]が学校の環境に慣れるまで少なくとも半年以上かかるということを示している。

しかし、転校生の転入地に対する愛着形成に関する研究はあまりされていない。

一方、大人を対象とした研究であるが、古川・大野[8]が地元の商店街などの店がなくなるなど、環境が変化することにより、愛着を自覚する場合があるという報告をしている。つまり、転校することで昔の地元への愛着に気づき、転入地への愛着を感じる妨げになるのではないかと読み取れる。また引地・青木[9]は、地域に対する肯定的な認知から肯定的な印象を形成し、その印象が愛着を形成すると言う。これからも転校に対して否定的な感情を持っていると地域にも否定的な認知を引き起こし、愛着を感じる妨げになるのではないかと考えられる。

表 1 先行研究

	子ども		大人
	一般児童	転校生	
地域	尾関・吉澤・中島(2009) 地域住民との関わりによる子どもの愛着の変化について		鈴木・藤井(2008) 消費行動が地域愛着に及ぼす影響について 古川・大野(2008) 環境の変化により愛着を自覚する場所・ときについて 引地・青木(2005) 地域に対する愛着形成の心理過程
学校	加藤(2010) 子どもへ愛着を築かせる生活学習の実践	塚本(1990) 転校生の学校適応について	

こうしたことから、地域愛着の育み方や転校生の学校適応の研究はされているが、転校生の転入地への適応という分野では研究が少ない。にもかかわらず転校生は転入地に対して愛着を形成していくのに困難が伴うおそれがあるといえる。そこで本研究ではこれらの問題を解決する糸口をつかむため、調査によりどのようにして愛着をもつようになるのか、といったことを明らかにしていく。

4. 調査の方法

転校生が転入地に対してどのようにして愛着をもつか明らかにするため、幼稚園・小学校時代に転校を経験している大学生の男女 6 名に調査を行った。

調査には図 1 のような運勢ライン法を用いた半構造化インタビューの手法を採用した。運勢ライン法とは元は小説や伝記などの物語を学習者に詳しく理解させるために考えられた方法である[10]。①出来事を思い出させる、②鍵となる出来事に注目させる、③出来事全体を見渡すことができる、④出来事の関連を見つけることができる、⑤時系列で表現できる、という利点があり、半構造化インタビューだけでは難しい、地域への愛着の変遷を聞いていくのに適している方法であると考えた。

半構造化インタビューでは表 2 に挙げた項目を中心に聞いて行った。

表 2 半構造化インタビューの質問項目

各年代での地域への愛着の度合い
愛着が増減していたら、その理由
各年代で印象に残っていること
あなたにとっての地域愛着とは
あなたにとっての地元の範囲

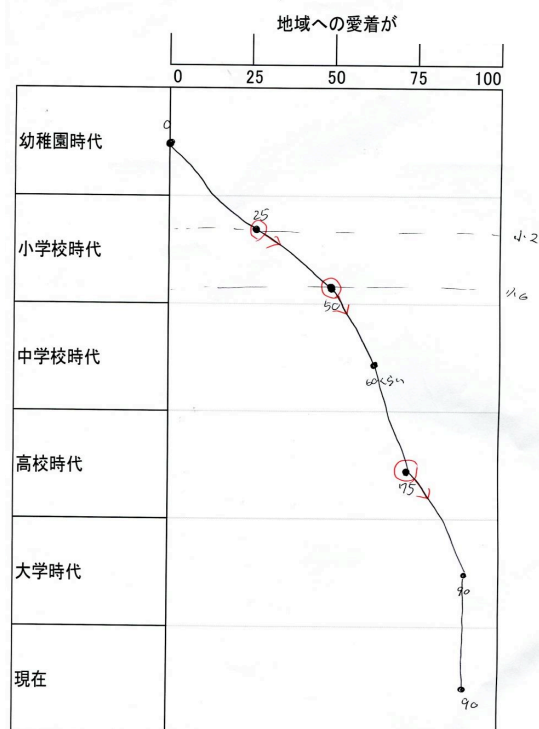


図 1 運勢ライン法のプリント

5. 結果と考察

半構造化インタビューにより得られた発話を分析してみたところ、転校生の転入地への愛着に関して、図 2 のようにまとめることができた。

他者への説明などを通して地元について意味づけすることは地域愛着のことであるプレイスアタッチメントと関係している。一方、友人関係などの人に関係することは地域への所属感であるプレイスアイデンティティと関係している。行動範囲が広がるなどといったような地域に関係することは、地域への所属感を高める場合もあり、また、地域への愛着を感じるようになる場合があることが明らかとなった。愛着を感じる要因と同時に愛着を減少させたり、感じにくくさせたりする要因も明らかとなった。

以下に図を構成する具体的なデータを示しながら考察する。

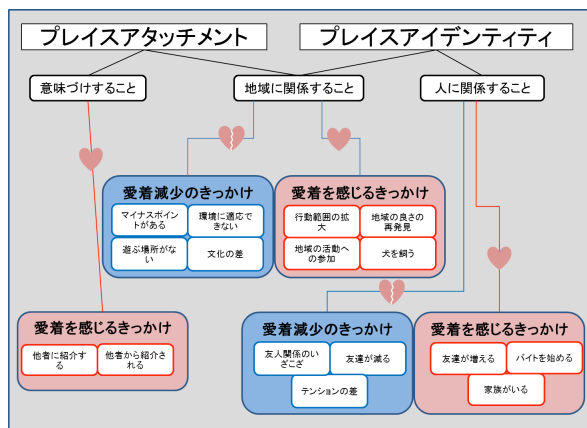


図 2 地域愛着を感じる要因

5.1 人に関係すること

人に関係することとは、転入先での学校での友人関係や、地域の人々との関わり、家族の存在などのことである。

D さん：ある程度仲良くなった子とかにこういうボランティアがあるから行って見ないかとか誘われたりして、ああちょっと楽しいなあって思い始めました。

A さん：他の学校の子とかも来るんですけど、交流が増えて、友達も増えて、小学校生活より楽しくなったかなあと中学校生活が。

E さん：転校してきた日とかに一人で帰るんだろうなあって思ってたらみんなが声かけてくれたり、修学旅行一緒に行こうって言ってくれたり、気を使ってたのかもしれないですけど、うれしかったです。

このように、転入地での友人の存在や家族の存在は大きく、地域への所属感を高めるケースが特に多いことがわかる。仲良くなった子とどこかにいったり、話を聞いたりすることで愛着が増すということが明らかになった。

5.2 地域に関係すること

地域に関係することとは転入地での行動範囲や、単純に転入地の良さを発見することである。

B さん：うーん。自転車でいろいろ行くようになって…いろんな場所があるんだなってわかったんで、土地勘というか。

A さん：んー、まあ高校に入ってからうちに犬が来たんですよ。で散歩とかに連れていくようになったんですけど、こんなところあったんだとか、この夕日がきれいとか、普段目を向けないところに目を向けるようになって愛着がアップしたというか。

C さん：買い物とかも良くいくようになって、このころから地元のこと案内できるようになってたかな。

このように行動範囲が広がることで転入地の良さを新しく発見できたという場合や、犬を飼い始めたことで、今まで目を向けなかった場所に気づき、愛着が増すということがあることが分かった。

5.3 意味づけすること

意味づけすることとは、他人に説明することなどを通して、自ら再定義することである。

B くん：大学入って地方とか来る子もいるじゃん。そういう子に地元どこって聞かれて答えて、どんなところって聞かれたらネタ半分に答えるようになって、さらに知ったし…ちょっと好きになったかな。

このように、他人に説明することでいままで当たり前だ感じていた転入地の良さが、さらに良いものだと感じることができる。それにより愛着が増すことがあることが明らかとなった。

6. 提案

以上より、転校生が転入地に対してどのようなきっかけで愛着を感じているのかということが明らかとなった。友達ができるなど地域への所属感が高まったところで地域の活動に参加したり行動範囲が広がることで愛着を感じるケースがあった。ただし転校生は転入地に対して愛着を築きにくいおそれがあり、その点を考慮すると転校生に働きかけをする場合、一時的な取り組みでは効果が薄いのではないかと考えられる。

そこで友人たちと地域に根付いた文化に触れあうことができるように働きかけることで転入生の地域への愛着

を築くことを提案する。地域に根付いた文化とは、たとえば祭りである。祭りはどの地域にも、大きいものから細々と続いているものまでが存在する。総合的な学習などの授業の一環としてグループで祭りの調査などをし、そのグループで祭りに行ってみることで友人も増え、文化を知ることができるのではないかと考えた。さらに地域のコミュニティとの関わりも生まれるため、友人関係だけでなく地域への所属感というものを生むことができる。

しかし、そのためには学校の取り組みが必要不可欠である。そういった授業を行わなければならないし、学校と地域の祭りの参加を呼び掛ける連携も重要になってくる。

7. 結論と今後の課題

本研究では転校生が転入地へどのようにして愛着をもつようになるのか、半構造化インタビューにより調査した。その結果、大きくまとめて4つのことが明らかになった。1.生活の変化により地元の再発見があり愛着を感じることがある。2.他人に地元のことを説明することで地元の再認識をすることができ、愛着を感じることがある。3.行動範囲が広がることで地元の良さを発見でき愛着を感じることがある。4.地元でこのところにおける友人ができることで地域への所属感が増し、愛着を感じるきっかけとなる。

しかし転校生が転入地で自ら活動をし、愛着を築いていこうとするかということと必ずしもそうではなく、周囲の環境からの働きかけも必要である。

そこで転校生が転入地へ愛着を築くことができるように、地域からも学校からも、双方が連携して転校生に働きかけをすることを提案した。今後は一般児童・生徒だけでなく、転校生に向けての取り組みが増えることを期待する。

参考文献

- [1]文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説生活編
 [2]加藤 亜美 2010 「地域への愛着」の基盤を築く生活科学習 一都市部における第2学年「秋の町探検」の授業実践を通して— 生活科・総合的学習研究 8 , 87-96, 愛知教育大学生生活科教育講座
 [3]Hernandez, B., Hidalgo, C.M., Salazar-Laplace, M.E., & Hess, S. 2007 Place attachment and place identity in natives and non-natives. *Journal of Environmental Psychology*, 27, 310-319
 [4]妹尾 俊之 2010 地域ブランドのコミュニケーションデザイン 商経学叢, 79-92, 近畿大学商経学会
 [5]花森 剛・田中 紀之・三浦 研・高田 光雄 2004 転入後の交流活動の変化からみた I ターン者の適応：中

山間地域における I ターン者の地域適応に関する研究 その1(住宅地のしくみ,建築計画 II) 2004 年度大会(北海道)学術講演梗概集. E-2, 455-456, 社団法人日本建築学会

- [6]尾関 美喜・吉澤 寛之・中島 誠 2009 地域住民との社会的交流が子どもの向社会的行動に及ぼす影響-地域からの恩恵と地域への愛着による媒介モデル 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 1-9
 [7]塚本美恵子 1990 新しい環境への適応：適応の概念と転校生の学校適応に関する調査報告(1) 国際基督教大学学報. I-A, P, 111-133,
 [8]古川 慎一・大野 隆造 2008 環境の変化により愛着が自覚される場所に関する研究：その1 愛着を抱かれる場所の抽出(地域環境評価, 環境工学 I) 学術講演梗概集. D-1, 113-114 社団法人日本建築学会
 [9]引地 博之・青木 俊明 2005 地域に対する愛着形成の心理過程の検討 景観・デザイン研究講演集 No.1, 232-235
 [10]久保田 善彦・倉田 優子 2010 運勢ライン法とインタビューに見る新任保育者の満足度の変容に関する一考察 臨床教科教育学会 臨床教科教育学会誌 第10巻 第1号 19-27